

違法放流エサで解明

生態系への影響が深刻とされ、飼育や運搬などが禁止される「特定外来生物」への指定が論議されている北米原産のオオクチバスについて、エサから放流時期を探る

オオクチバス

手法を北海道立水産孵化場の伊藤富子・研究主査らが開発した。違法放流を調べる手立てになりそうだ。7日開かれた環境省の外来生物法関連の専門家会合でも紹介された。(清水弟)

体の成分に違い

北海道の研究者、時期特定

自然界には、通常の炭素12、窒素14よりわずかに重い炭素13、窒素15といった安定同位体が少量存在する。バスのような大型肉食魚では体の炭素13や窒素15の割合（炭素13や窒素15の割合（炭素窒素同位体比）は、エサによって増減することが知られている。

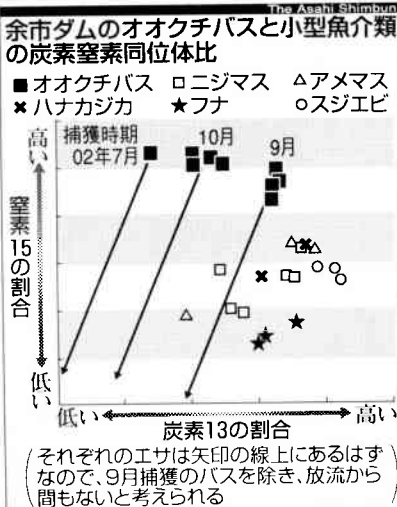
伊藤さんらは、養殖業者から買った体重約4kgのオオクチバスの稚魚を人工飼料で1年間飼育、バスの炭素窒素同位体比

の変化を調べた。次に、約50匹のバスのエサを石狩古川で採れたスジエビに代えて同位対比の変化をみた。スジエビの炭素窒素同位体比は人工飼料とは違うため、バスの同位体比は徐々に変わり、半年ほどで安定することになった。

9月捕獲のバスを除いて「この水域の魚介類を半年以上食べ続けているとは考えにくく、最近、違法放流された可能性が高い」と分かった(図)。

この実験を基に、北海道余市町の余市ダムで02年7月、9月、10月に捕獲したオオクチバス(体重6.360kg)と、胃内のスジエビ、余市ダムでエサとなりうるニジマスやアメマス、ハナカジカ、フナの炭素窒素同位

伊藤さんらは、札幌市近郊の南幌町観水公園池で02、03年に捕獲したオオクチバスも調べた。いずれも体重約100kgと500〜700kgの2グループがあり、500kg以上は長期間ここに生息していたと見られるが、100kg級は比較的最近放流されたと分かった。



規制種に選定 結論を先送り

環境省方針
環境省は、外来種が生態系に及ぼす被害を防ぐ外来生物法で規制される特定外来生物の選定で、ブラックバスの一種のオ

オクチバスを指定するかどうかの議論を延長する方針を決めた。釣り愛好者の団体らが反発していることに配慮した。

同野化場の工藤智・河川湖沼科長は「炭素窒素同位体比は魚の育った場所を調べる技術だ。北海道はバスが入った時期が新しく、違法放流が相次いだことできれいな結果が出た」と話している。

Kojima

種は6月の法施行までに決まる第1陣では指定されない見通しだ。